

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成30年は11万7千トンとなりました。

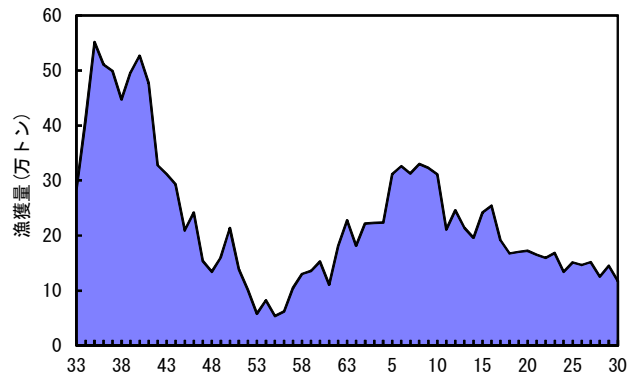


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、4月に甑島周辺、串木野沖でマアジ中、大、小（1～3歳魚：2017～2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。5、6月に長島（内海）、牛深沖、串木野沖、甑西でマアジ小、豆（0～1歳魚：2019～2020年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、4月に内之浦沖、立目崎沖でマアジ小（1歳魚：2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。5、6月に立目崎沖でマアジ中小、小（1～2歳魚：2018～2019年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で90トンの水揚げで、前年の40%及び平年の24%でした。

3. 県内の令和2（2020）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：マアジ小、豆（0～1歳魚：2019～2020年生まれ）

来遊量：前年・平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

漁獲の主体がマアジ小となった5月以降は漁獲量が低調に推移していること、今期もマアジ小が漁獲の主体となることが予測されることから、前年・平年を下回ると考えられます。

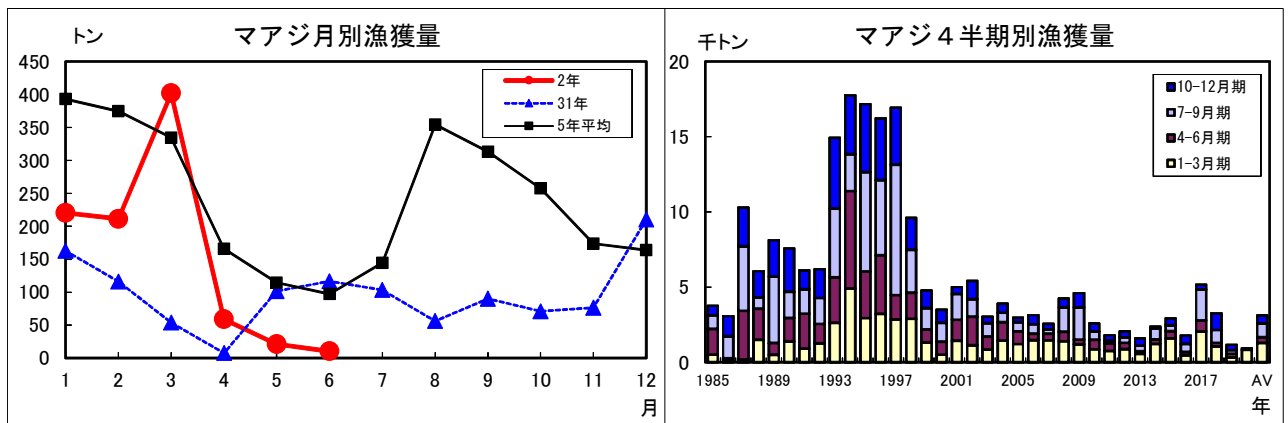


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年6月24日までの水揚げ量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成30年は54万1千トンとなりました。

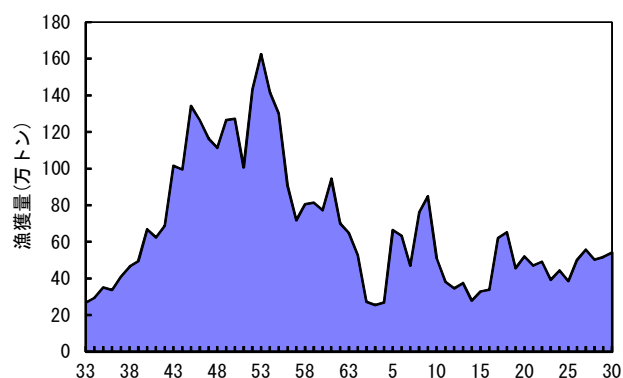


図 全国のサバ類漁獲量の推移

年

2. 県内の令和2（2020）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、4月に野間池沖、ツクラ瀬、甑東でサバ類大（3～7歳魚：2013～2017年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、4月に甑下、立目崎沖でマサバ中（3～7歳魚：2013～2017年生まれ）主体の漁場が形成されました。5、6月に屋久島周辺でゴマサバ中（3～6歳魚：2014～2017年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で6,843トンの水揚げで、前年の97%及び平年の130%でした。

3. 県内の令和2（2020）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：ゴマサバ中、中小（3～6歳魚：2014～2017年生まれ）、ゴマサバ豆（0歳魚：2020年生まれ）

来遊量：前年、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期は、成魚であるゴマサバ中（3～6歳魚）に加え、新規加入群である0、1歳魚が漁獲の主体になりますが、漁獲の主体がゴマサバ中となった5月以降は漁獲量が低調に推移していること、またゴマサバの資源動向が東シナ海系群は横ばい、太平洋系群は減少傾向を示していることを考慮すると、ゴマサバの来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

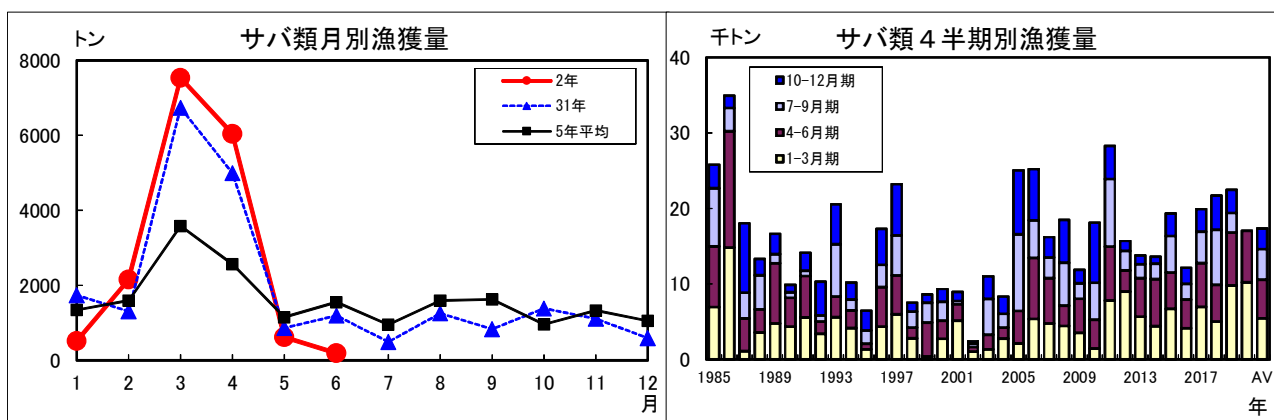


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年6月24日までの水揚げ量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成30年には52万トンとなりました。

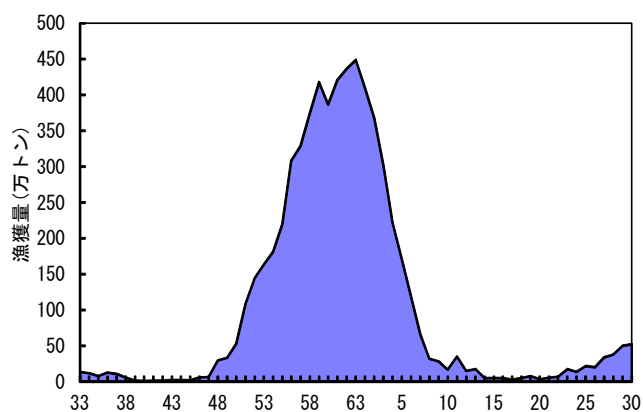


図 全国のマイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、6月に阿久根沖で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、5、6月に竹島、内之浦沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、109トンの水揚げで平年の45%でした。（前年は水揚げがなかったため比較できず）。

北薩海域の棒受網では、80トンの水揚げで平年の171%でした。（前年はまとまった水揚げがなかったため比較できず）。

3. 県内の令和2（2020）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：小羽～中羽（0歳魚：2020年生まれ）

来遊量：非常に低調であった前年を上回り、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚は、5月からまき網、棒受網でまとまった漁獲があり、低調だった前年を上回っているものの、平年を下回って推移していることから、前年を上回り、平年を下回ると考えられます。

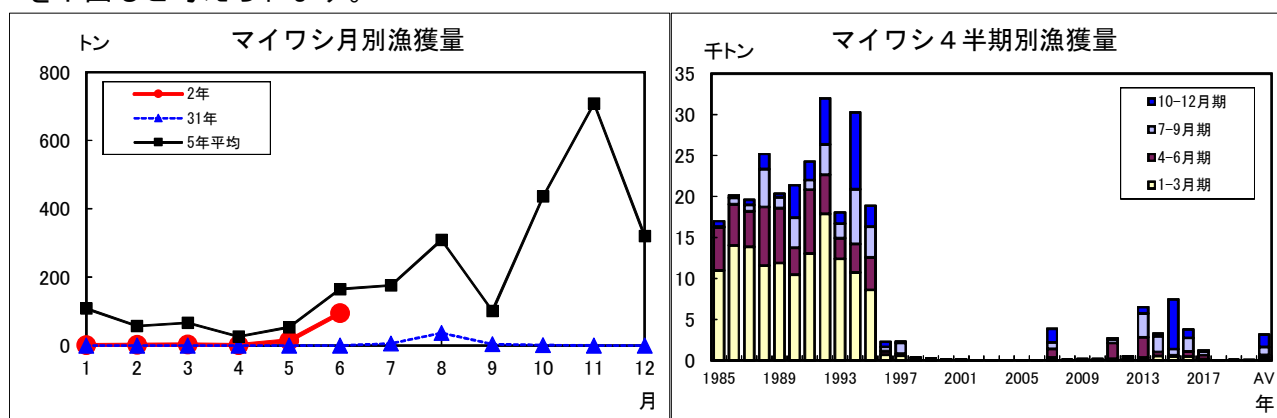


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年6月24日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となったが、平成30年は5万4千トンと大きく減少しました。

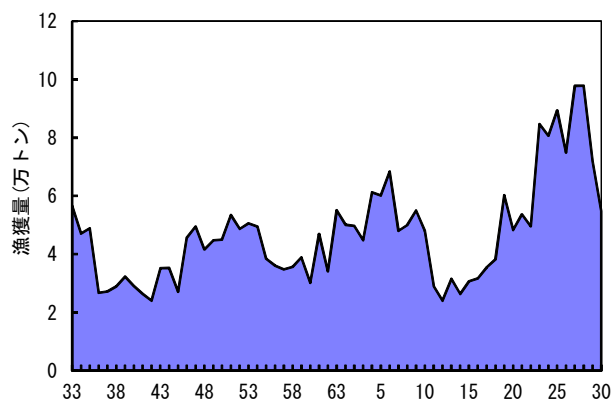


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、5、6月に阿久根沖、甌島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、4月に内之浦沖、5、6月に枕崎沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、4月は中～大羽（1歳魚：2019年生まれ）、5、6月は小羽（0歳魚：2020年生まれ）主体に415トンの水揚げで、前年の112％、平年の62％でした。

北薩海域の棒受網では、118トンの水揚げで、前年の178％、平年の102％でした。

3. 県内の令和2（2020）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：小～中羽主体（0歳魚：2020年生まれ）

来遊量：好調だった前年、平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚（2020年生まれ）は漁獲に加入した5月から前年、平年を下回って推移していることから、今期も前年、平年を下回ると考えられます。

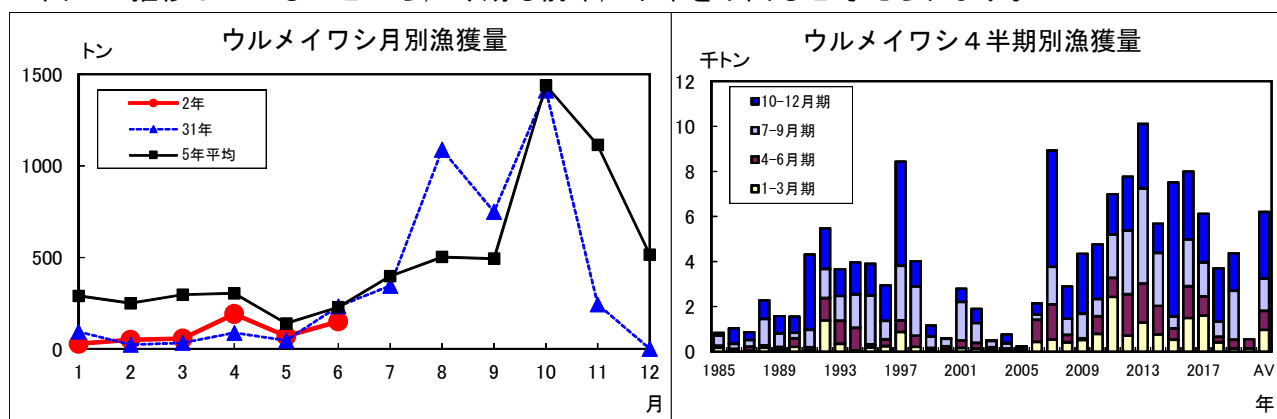


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)、令和2（2020）年6月24日までの水揚げ量を使用

[カタクチワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成30年は11万1千トンとなりました。

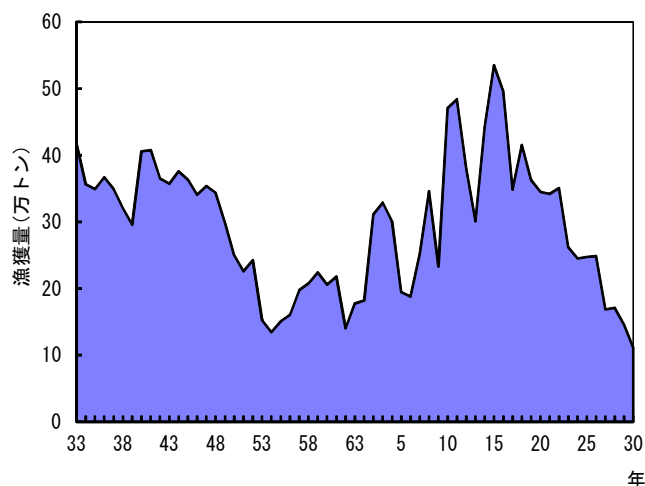


図 全国のカタクチワシ漁獲量の推移

2. 県内の令和2（2020）年4～6月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、八代海で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、5月に黒島、竹島、枕崎沖、6月に内之浦沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中羽（1歳魚：2019年生まれ）主体に648トンの水揚げで、前年の58%、平年の53%でした。

北薩海域の棒受網では、128トンの水揚げで、前年の59%、平年の44%でした。

3. 県内の令和2（2020）年7～9月期の見とおし

漁獲主体：中～大羽（1歳魚：2019年生まれ）

来遊量：前年，平年を下回る

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

前期に引き続き、今期の漁獲の主体となる中～大羽（1歳魚：2020年生まれ）の6月の漁獲量は前年，平年を下回っており、6月の漁獲量と7～9月の漁獲量には正の相関があることから、今期は前年，平年を下回ると考えられます。

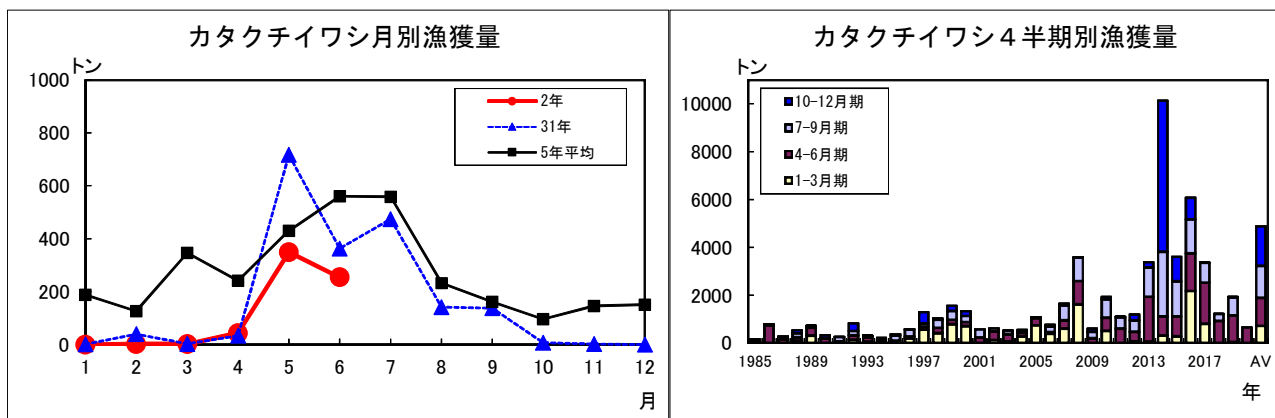


図 カタクチワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，令和2（2020）年6月24日までの水揚げ量を使用

[イワシ類参考資料]

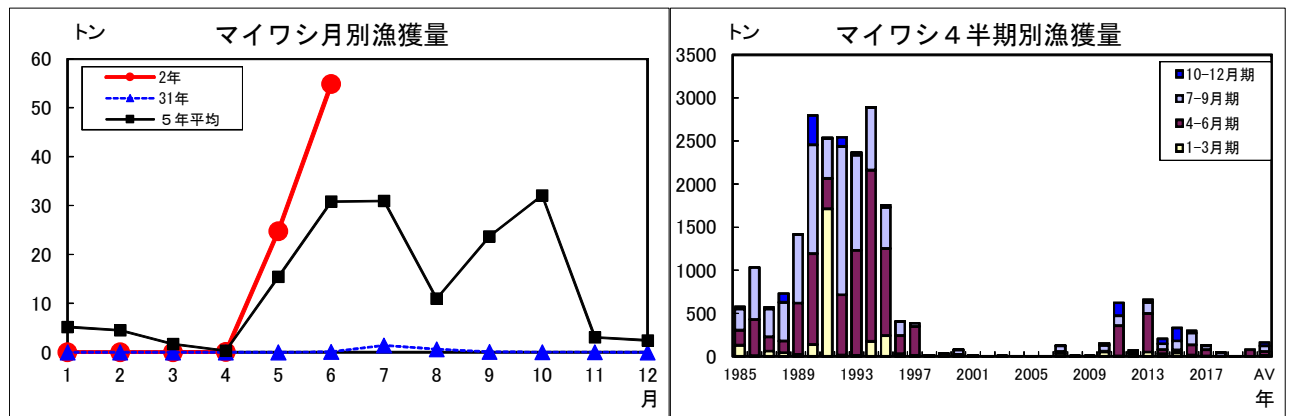


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

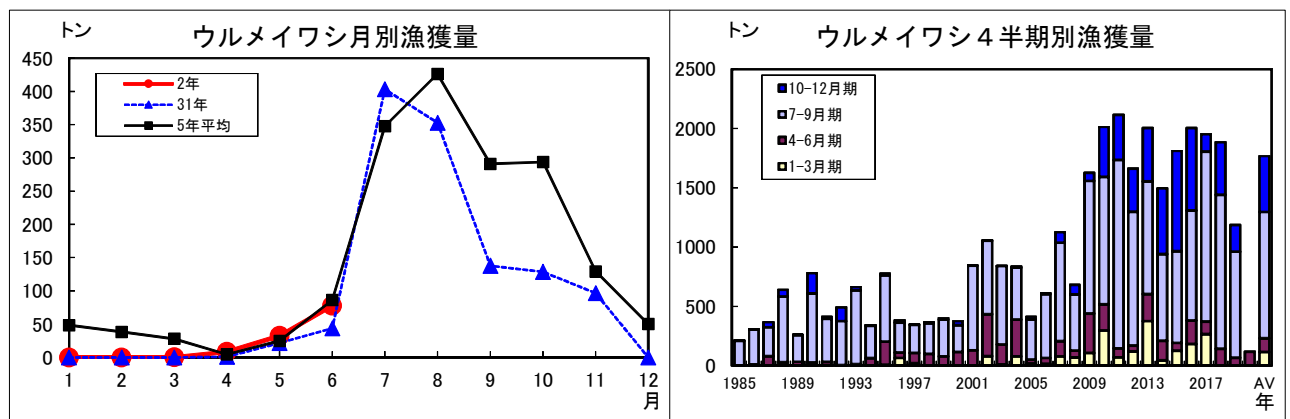


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

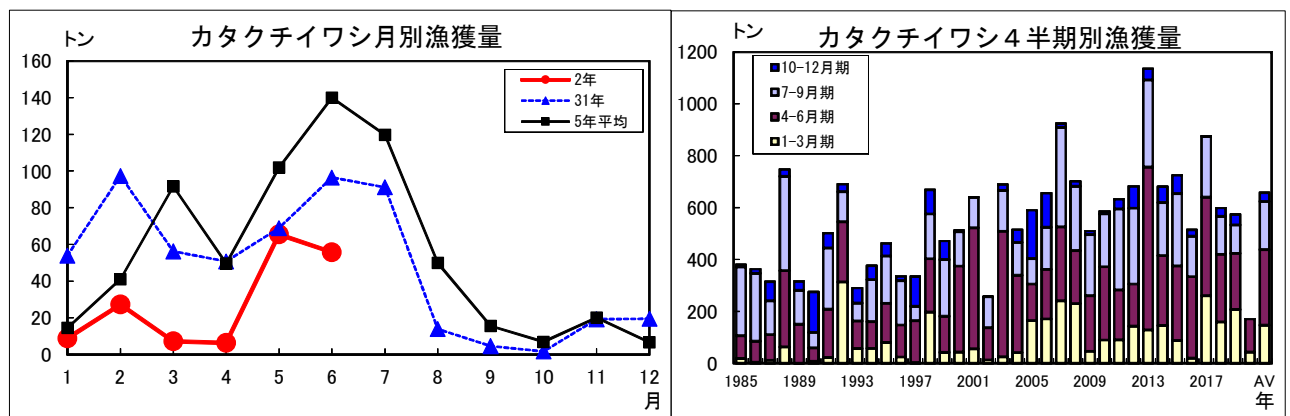


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 令和2(2020)年6月24日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の令和 2（2020）年 4～6 月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成 2 年の 21,700 トンをピークに急減し、平成 6 年以降は、1,500 トンから 5,000 トンの間での推移しており、令和元年は 3,627 トンとなりました。

4 港計のまき網では、臥蛇島および屋久島周辺でクサヤモロ小主体の漁場が形成されました。期全体で 487 トンの水揚げで、前年の 331 %及び平年の 159 %でした。

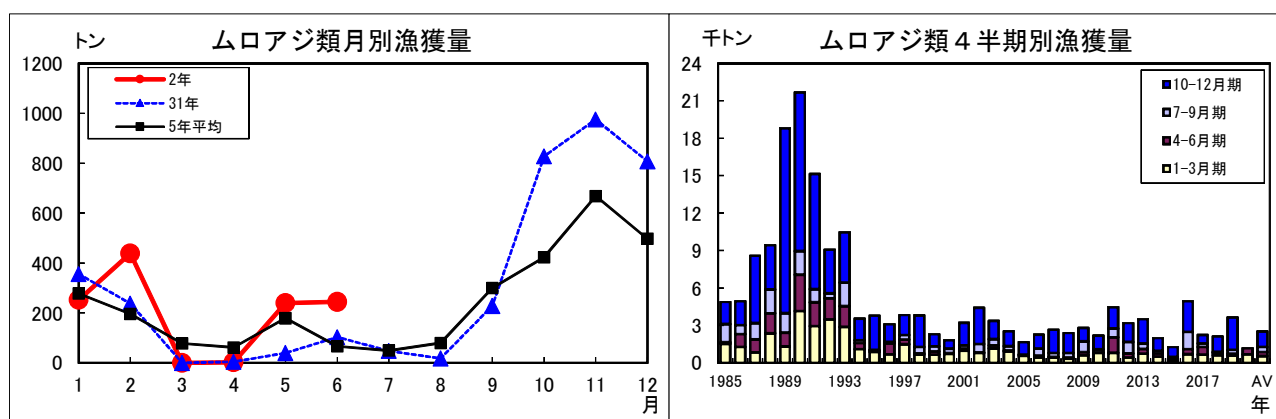


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和 2（2020）年 6 月 24 日までの水揚げ量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の令和 2（2020）年 4～6 月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の 5,300 トンをピークに一旦減少し、平成 7 年に 4,400 トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成 20 年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、令和元年は 1,211 トンとなりました。

4 港計のまき網では、主に口之島、屋久島周辺でオアカムロ中、中小主体の漁場が形成されました。期全体で 702 トンの水揚げで、前年の 348 %及び平年の 153 %でした。

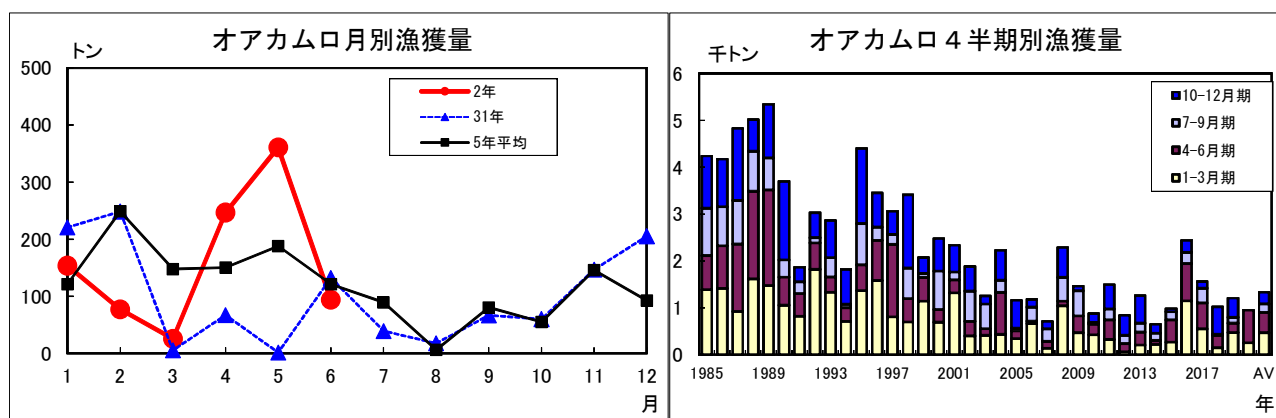


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値(AV)，令和 2（2020）年 6 月 24 日までの水揚げ量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の令和 2（2020）年 4～6 月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は，昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり，その後低調に推移し，平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが，平成 16 年以降は低調に推移し，令和元年は 361 トンとなりました。

4 港計のまき網では，八代海沖，東町沖でマルアジ大，中主体の漁場が形成されました。期全体で 116 トンの水揚げで，前年の 128 %及び平年の 210 %でした。

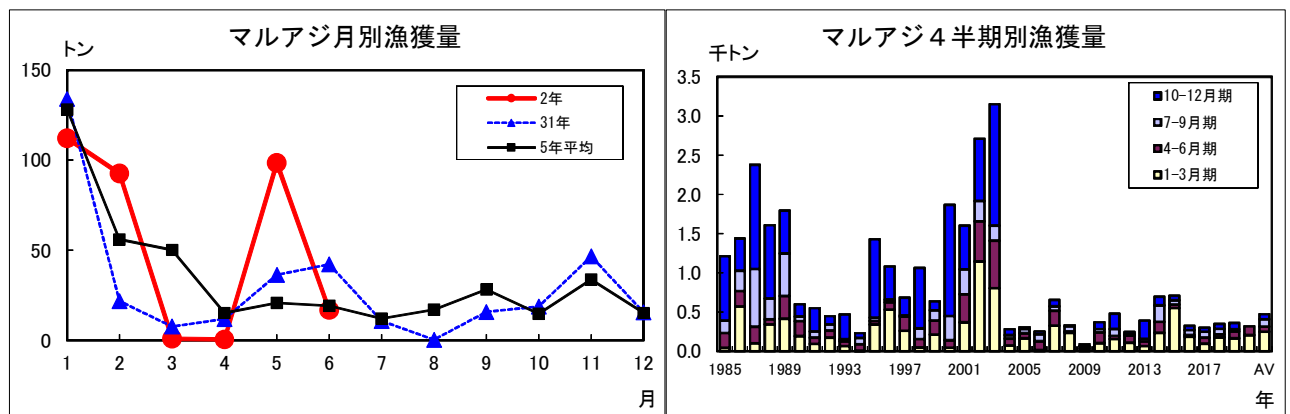


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，令和 2（2020）年 6 月 24 日までの水揚げ量を使用